

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 村尾 誠一



学位申請者 アンドレア・フィオレッティ Andrea FIORETTI

論 文 名

**TRADUZIONE: PRATICA E CONFRONTO--Il discorso narrativo in Higuchi Ichiyō attraverso le traduzioni (翻訳：実践と比較--翻訳からみる樋口一葉の語り)**

**審査の結果**

本論文は共同指導共同学位制度に基づき、すでにローマ大学において最終試験が公開審査として行われ、博士号授与に相応しい、きわめてすぐれた成果である旨が最終試験報告に記載されている。この結果をもとに、2016年5月12日、本学において、和田忠彦教授、林和宏准教授、岩崎務教授、浦田和幸教授を審査委員として、村尾誠一を主査として最終試験を行った。

最初に、本論文執筆者のアンドレア・フィオレッティ氏から、論文の概要が報告され、続いてローマ大学での最終試験に参加した和田教授から、同大学での審査の報告があり、その後、審査委員による質疑応答が行われた。

本論文は、樋口一葉の小説作品4篇を対象に、比較翻訳研究とよぶべきアプローチにより、一葉のテキストにおける「語り手」の位置と役割を分析した物語論と翻訳論を融合させた独創性の高い論文である。翻訳の実践と理論をふまえた精緻な分析の前提には、翻訳テキストを「普遍的な有効性をもつ文学テキスト」としてとらえる翻訳論的アプローチがある点も評価に値する。よって、本審査委員会はアンドレア・フィオレッティ氏の本論文が博士学位授与に相応しい業績であると全員一致で判断した。

**論文の概要**

本論文は、樋口一葉の代表的な小説4篇（『大つごもり』『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』）における語り手の位置と役割について、現代日本語訳および欧米各国語訳との比較を通して、翻訳論と物語論を融合した独自の視点から分析したものである。

論者フィオレッティ氏は、各国語訳の分析と比較に先立ち、実際に『たけくらべ』と『にぎりえ』のイタリア語訳（ちなみに『たけくらべ』はイタリア語初訳、『にぎりえ』はほぼ百年ぶりの新訳）を行

い、2013年に刊行している(同翻訳は補足として本論文に対訳の形式を採り収載されている)。

本論に先立って序章で、論者は、先行研究を「翻訳のナラトロジー」と名づけ概観する。

物語論を中心とする翻訳比較研究は、翻訳研究においては比較的新しい傾向であることをふまえ、論者はまず、イギリス人作家ジェーン・オースティン、ヘンリー・フィールディング、ヴァージニア・ウルフの語りの方がフランス語にどう訳されてきたかを分析した研究を参照し、同様の分析が一葉の作品についても有効かどうかを検討する。その後、一葉文学の物語論的分析の成果として、笹川洋子『樋口一葉 物語論・言語行為・ジェンダー』(2013年)を、そして翻訳論的分析の成果として、満谷マーガレット「一葉と翻訳『十三夜の運命』」を挙げ、論者と同様の両者を融合させた視点に立つ先行研究が存在しないことを確認する。

ちなみに「翻訳のナラトロジー」と論者が名づける分析手法の日本文学への適用例として、先に挙げた緑川真知子による『源氏物語』の英訳における語り的手法をめぐる分析に着目し、緑川が分析すべき近代作家として、川端康成、泉鏡花に加えて樋口一葉を挙げている点を特記する。

こうして先行研究を概観したのち、論者は、樋口一葉の小説をめぐる翻訳比較研究の可能性の検討に移る。一葉の小説にみられる主題の「同時代性」と文体の「前近代性」の共存を、矛盾ではなく、稀有な特性としてとらえ、その特異な文体を訳すことが、文学的参照点をもたぬ「未踏」の素材に直面することだと指摘する。そして、このとき翻訳者および翻訳という行為が必然的に著しく前景化するのであり、「翻訳者の声」(Schiavi-Hermans)、あるいは「翻訳の語り手の声」(O'sullivan)などと定義される翻訳者の介入が出来するのだと仮定する。

一葉作品の現代語訳や欧米語訳の検討が明らかにするのは、こうした「翻訳者の声」の所在であり、とりわけ、原テキストよりも翻訳テキストにおいてはるかに活発に語りを導く「語り手の声」の在処であると指摘する。

次いで本論である第一章から第五章を概括する。

『大つごもり』は、一葉が夭折したわずか7年後、1903年、藤生ていこにより英訳されている。これが一葉作品の最古の翻訳である。第一章では、明治時代に女性教育と「女中」の労働条件改善運動に貢献した翻訳者藤生ていこが、翻訳を介して、作品の人物造型に反映される実例が紹介され分析される。『大つごもり』の主人公お峰にたいする同情を翻訳に反映する藤生のありようこそが、「翻訳者の声」であり、「語りの翻訳」であることが確認される。そののち、藤生の翻訳に加え、Danlyの英訳とGeymondの仏訳、そして『大つごもり』の現代語訳の比較分析に移る。対象となるくんだりは、とくに語り手と登場人物のそれぞれの声が相互にどう交差するかに関わるものである。一葉が登場人物の科白をカギ括弧などで括っていないこともあって、こうしたくだりがどのように翻訳できるかという問題はいつそう複雑になることが検証される。

第二章と第三章では『たけくらべ』について論じられる。第二章では論者自身によるイタリア語訳がいかなる点において独自性を有するかが例示検証される。なかでも直接語法を明示する引

用符の使用を避けたこと、そして語りの主要な時制として現在形を用いたことなどが挙げられる。それは、一葉の小説において「語りの時間」が「物語の時間」から分離されていないという事実に基づく選択であるという。物語の出来事が、語りの声のおかれている時間より前に位置すると読者が見なしうる時間の指標が見当たらないということだ。それゆえ、ほぼすべての翻訳が採用している「過去時制」は、翻訳の過程で作られた時間であり、それは、それぞれの翻訳された言語の読者たちの期待に応えて、つまり欧米風の物語形式に一葉の語りを近づけるための工夫とみなすことができると論者は考察する。

第三章では『たけくらべ』の原文と翻訳における話法、とりわけ自由間接話法について論じられる。ジェーン・オースティンをはじめ、近代小説に頻出するようになる自由間接話法などの語り的手法は、分析の対象とした(20世紀初頭に出版されたものを含め)翻訳テキストほぼすべてに確認することができる。そして『たけくらべ』の原文にも自由間接話法のような機能や役割を果たしている語りがある一方で、翻訳においてはそれが修辞上の特殊な効果を得るために用いられていることが指摘される。

また、『たけくらべ』の翻訳を比較分析するにあたり、松浦理英子の現代語訳と、2015年に出版された川上未映子の新訳が比較検討される。原文の特徴一つひとつを重視して現代の日本語に再現することを試みた松浦の翻訳と比べて、「超訳」と定義される川上の現代語訳は、読者の理解を助けるあらゆる情報を本文中に繰り入れている。全く異なるアプローチをしめす両者の特性を分析することにより、現代語訳のもつ可能性と限界が検証される。

第四章では『にぎりえ』の翻訳が扱われる。まず英訳に先行する下位春吉のイタリア語訳が検討され、その特徴のひとつに、主要時制としての現在形が過去時制を代替する点が挙げられる。そして下位による時制選択が一葉作品の翻訳における唯一の例であり、1920年という刊行時を考慮するとき、翻訳史上きわめて興味深い革新的事例であると指摘する。他の後続翻訳と比べ、下位訳は一葉自身が採用した手法、つまり地の文や語りの声よりも、登場人物の直接話法に重きを置くという手法を踏襲していると論者は評価する。

語りが登場人物の直接話法によって導かれるという特徴は、第五章で扱う『十三夜』にもみられる。ここでも翻訳者たちがおしなべて自由間接話法を選択しているのは、おそらく小説の話法における「不釣り合い」を埋め合わせるためだと論者は指摘する。その結果、現存する翻訳のほとんどにおいて、語り手が原文よりも明らかに行動的な役割を果たしているという。それを論者は「自由間接話法の乱用」として批判的に指摘している。

『十三夜』には、先述の藤生ていこの翻訳と同時代にまで遡る「古い」翻訳、つまり1904年に津田梅子が発表したものがある。論者は、雑誌《The Student》掲載の英訳を、日本人女性の教育改善に全力を注いだ津田梅子の教育活動の一環を為すものとする。それは津田にとって、女性の結婚生活改善のためには、英語教育などによる女性の文化水準向上が必須だったからと指摘する。それゆえ津田による『十三夜』翻訳の目的は、藤生ていこのそれとは異なり、日

本人にむけた内向きの教育啓蒙にあったと分析される。

以上、第一章から第五章にわたり本論を展開したのち、結語が配される。

まず翻訳の比較分析というのは往々にして、いわゆる原文への忠実さを基準に、それぞれの翻訳テキストの質的な価値を評価することに傾きがちだが、それは本研究の意図するところではないことが強調される。そもそも一葉の作品については、それが書かれ、そして発表された多様なバージョンが存在するがゆえに、いわゆる「オリジナル」はどれかという特定がそもそも不可能であり、加えて、それぞれの翻訳はその独自の文化的・歴史的な背景において、文学テキストとしての価値を考慮して評価されるべきであると論者は述べる。

それゆえ本論文においては、翻訳者たちが使用した言語や言葉遣いなどの選択については散発的に論じるとどめている。本研究の主眼はむしろ、日本語の原文とは異なる言語的文脈において、作品のもつメッセージが伝達されるその様態を検討することにあつた。

そして論者自身は、本論文に論として結実させる比較検証の成果を実践の場で確認すべく、2013年刊行の一葉のイタリア語訳に臨んだとみなすことができる。それが本論文の付録としても収められている価値と必然性も高く評価するべきであろう。時制の処理、原文のリズム、語順や段落の長さ、話法の処理に重点をおいた翻訳を実践したのである。とりわけ原テキストにおける地の文と語り手の声と登場人物の科白を、引用符などで区別しないという翻訳上の選択は、一葉のテキストがもつ語りと文体的特徴を欧米語において再現したきわめて稀有な試みであり、少なくともイタリア語訳としては初の試みである。

#### 論文の評価および最終試験の概要

この論文は、最初に記したように、比較翻訳研究とよぶべきアプローチにより、物語論と翻訳論とを融合させた独創性の高い論文であることを審査委員一同で確認した。樋口一葉の小説という、明治期日本にしか現れ得ないテキストの欧米語や近代日本語への翻訳という特殊な問題を具体的に論じながら、だからこそ見えてくるという形で、翻訳論上の普遍的な問題に到達して行く、論の卓越性も確認できた。

審査委員による質疑応答では、翻訳比較分析に関わる『たけくらべ』の具体例を中心として、註釈か本文への繰り込みかという選択の問題、地の文の「き」と会話の「た」という「過去形」の処理方法、「自由裁量」と「逸脱」の境界、直接話法と(自由)間接話法がはらむ問題系などをめぐって活発な議論が交わされた。フィオレッティ氏はこれらの問いにたいして、2013年刊行のみずからのイタリア語訳を効果的に参照しつつ、今後の課題に対する認識もしめしたうえで、明晰かつ的確に応答した。

共同指導共同学位制度に基づきイタリア語で執筆された論文にもかかわらず、本質的かつ具体的な質問が多く提示されたのは、フィオレッティ氏の本論文が多くの疑問点を含むためではなく、その問題提起がきわめて明晰であり、文学研究として

も、翻訳研究としても、示唆に富むものであり、審査委員の問題意識を強く刺戟したからに他ならない。よって審査委員会は全員一致で本論文を博士の学位に相応しい貴重な成果であると判断した。

#### **審査結果**

上述のとおり、本審査委員会は全員一致で、アンドレア・フィオレッティ氏に本論文をもって博士(学術)の学位を授与することが適切であると判断した。